

交差する生命の彩。
あれから六年、瀬戸内―



舞台写真：荒井真治

「島」

第4回(1958年)岸田國士戯曲賞受賞作品

【作】堀田清美
【演出】藤井ごう

【美術】石井強司

【照明】和田東史子

【音響効果】近藤達史

【衣裳】宮岡増枝

【方言指導】大原穰子

【宣伝美術】フルヤマモトミ

【舞台監督】青木幹友

【製作】川田結子

【出演】

上甲まち子

渡辺尚彦

藤木久美子

吉村直

北直樹

崎山直子

清原達之

矢野貴大

塚原正一

川端悠吾

清水美輝(スターダス・21)

他



秋田雨雀
土方与志 記念

青年劇場

終戦から6年、瀬戸内海に浮かぶ小さな島。20歳で被爆した青年教師・学は、母のゆう、進駐軍の臨時雇いで働く妹の史とともに暮らしている。ある日、東京で働く同級生・清水が訪ねてきたことをきっかけに、島を出て自立したいという思いが強くなってきて……。朝鮮戦争の特需に支えられている島。貧しさゆえ進学を諦める教え子、許されぬ恋、差別……。溢れんばかりの「生」への渴望が、いまを生きる私たちに鋭く照射する。2010年の初演時に深い感動を呼び起こした舞台、待望の全国巡演へ！



川端悠吾



矢野貴大



清原達之



北直樹



藤木久美子



上甲まち子



清水美輝
(スターダス・21)



塚原正一



崎山直子



吉村直



渡辺尚彦



舞台写真：荒井真治

『島と現在』から『現在の島』へ 藤井ごう

「わしらが白髪の爺さんになる頃には、この地球上も大分様子が変わつとるよの。それ迄一粒一粒、種を大事に蒔いて生きるんよの。」
 —その時は、人類に貢献した言うんで—

被爆者である栗原学の劇中（1951年）の台詞—
 青年劇場での初演時（2010年）、

楽観できる事など実は何もなかった訳だが、それでもあの時はまだ3・11も起こっておらず、まだ一応神話は神話の体をギリギリ保っていて、世の風潮もここまでセンソウがカクジツに迫っている況ではなかった。

初演から『島』は8年目の旅へと出る。

元米大統領のレキシの訪問を経て、核なき世界への流れは新大統領の下で追求されることはなく、唯一のセンソウ被爆国はカクゴをするところか、とうの昔からその事にイロンを唱えていたとゆう体たらく—

僕ら舞台の作り手は、非力であることを思い知らされる日常が続いている。

学、そして作者堀田氏の思いとも確実に異なる『現在』がある。その事をどう考えようか—

2010年にこの作品が産声を上げた時とは違う意味が生まれ、受け取られ方も大きく変わり多くの出逢いの場を得てきた。それは喜ぶべきことなのだが、この作品が求められる世になってしまったとも言えるのだ。

でもだからこそ、わかりやすい言葉、わかりやすい敵、大きい声、外国ではこうである的な常識に囚われることなく、こうやって生きてきた人物たちの思いを苦しみを喜びを、現在の都合で「なかったこと」になどしないように、何度でもコトバに耳をすませ、ココロに寄り添う。

想像力が経験を栄養とするならば、学らの経験と選択は、今正に必要とされる想像力の基礎となるはずである。

舞台上にいつも通り人物たちを現出させよう—

人間の未来の為に あなた自身の為に

作者の願いと共に、『生』という事の意味が大きく僕らに迫っている。

2018年11月4日(日) 開演 17:00
 (開場 16:30)
 足利市民プラザ・文化ホール

◆チケット◆

一般 3,500円
 U25 2,000円
 (※当日券は+500円です)

【主催】青年劇場「島」を観る会
 【共催】公益財団法人足利市みどり文化・スポーツ財団
 【後援】足利市教育委員会 / 下野新聞社 / 両毛新聞社

〈プレイガイド〉

足利市民プラザ・足利市民会館
 〈お問合せ〉
 足利市民プラザ
 [TEL] 0284-72-8511
 [E-Mail] s-plaza@watv.ne.jp
 青年劇場「島」を観る会
 [TEL] 080-5473-0826 (村松)

